

はじめに

新しい春がやって来ました。学校においても、卒業式のさわやかな涙も乾き、希望にあふれた初々しい新入生を迎える季節です。

高校教員をしているほくも、卒業・入学を通じて、生徒たちとの出会いと別れを何度もくり返してきました。それは「1年」という地球の公転のリズムに合わせてです。また、生徒たちが高校生でいる間、毎日「おはよう」と「さようなら」を繰り返してきたのは、「1日」という地球の自転に従って生活してきたからです。

地球の公転

最初の授業では自己紹介をします。自分の出身地について話す際には、窓越しに太陽を指さしながら、「本当のことを話すと、ぼくは半年前、あの太陽の向こう側にいたんです」と宇宙人のふりをします。

・自分の年齢について話す際に

地球の自転

サン・テクジュベリの「星の王子さま」は、自分が暮らしていた星から地球に来るまでの間に6つの小惑星に立ち寄り、それぞれの星に1人ずついる住人と会話をします。

・命令ばかりしている威張りんぼうの王様
・自分をほめる言葉以外は聞かないうぬぼれ男
・何もかも忘れようとしているだけの呑み助
・忙しく財産の計算ばかりしている実業屋

・星の自転に合わせて街灯を忙しく点滅させる勤勉な点灯夫
・ずっと机に向かっていたままの知識だけ豊かな地理学者
そして、星の王子さまは、5番目に訪問した点灯夫だけは星の役に立っているけど、ほかの大人として本当にわけがわからない、と感じるのです。

星の自転のリズムに合わせて、

は、「ぼくは旅行が好きで、たとえば、生まれてから今まで、太陽の回りも43周も旅しました」と宇宙飛行士のふりもします。

生徒の誕生日には、「おめでとう。あなたは生まれてから太陽を何周回って、今日、宇宙空間の元の場所に無事戻ってきました」と祝福します。

地球という宇宙船が、太陽を中心に直径約3億kmの楕円を秒速30kmという猛スピードで循環しているために、景色も移り変わり、季節ごとの星座を見せてくれます。春の景色が目立つのは、ちょうど頭の真上を通り抜

けていく牛飼い座のアーケチュラス、獅子座のしっぽにあたるデネボラ、乙女座のスピカが大きな正三角形をつくっている姿です。

地球は太陽の回りを45億周以上も公転し続け、これからも繰り返していきます。ぼくたちの乗船は、その内の100周をつきあえるかどうかです。自分は何周できるだろう、子どもたちはあと何周の生命があれば」と思いたくもありませんが、永遠の生命を持つ「火の鳥」こそが、最も孤独でさびしい存在であることを、ぼくは手塚治虫の漫画で教えられました。

新しい春、新しい朝 繰り返すことの大切さと感動

日が暮れると街灯を灯し、夜明けが来ると街灯を消す。それを一度も忘れずに繰り返す仕事をしている人こそ、最も敬うべき人だということです。確かに、とても天気の良い日やとても悲しい日でも、それを続けてきたのですからね。

私の妻は1人目の子どもの出産の際に医療事故にあり、待望の子どもを失うだけでなく、自らも生死をさまようという経験をしました。意識が回復しても放心状態で、緊急手術のために全身に激しい苦痛が残っているのに、翌朝、「歯を磨く」と言っ

て必死で歯を食いしばって起き上がろうとしました。後にぼくは、阪神・淡路大震災の直後に家族を失ったという人が合同の自炊場で毅然とした顔をして大根を洗っている映像を見たときに、そのときの妻のことと重なって涙があふれたものです。

ルーティンと呼ばれる、日常

おきまりの仕事を繰り返すことこそが、真に「生きる」ということなんだと、改めて教えられた気がしました。

繰り返しのために

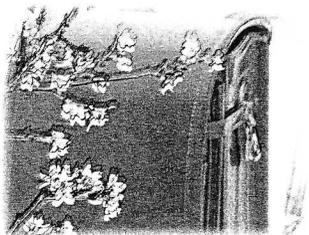
ぼくはまた新しい1年生の担任になりました。子どもたちには高校時代の経験や学びを通じて、空間的にも時間的にも、天文学的な大きな視野を持つてほしいと願っています。でもそれは決して、現実を忘れるためではなく、ここに存在することの意味と大切さを感じてほしいからです。

有限の地球なのに、いまだに右肩上がりの経済発展の幻想を抱いて、地球の環境をさまざまに変えていこうとしている社会。子どもたちに「おはよう！」から始まる毎日のルーティンを繰り返す大切さと、その中でこそその幸せの意味を伝えていくためにも、ぼくたちは、右肩上がりではない、本当の意味でのリサイクル社会を築いていかなければいけないのでしょうか。

勝村久司
text: Hisashi Katamura

— 新連載 —

星の子と老の詩



PROFILE◎かつむらひさし

1961年生まれ。京都教育大学天文学教室卒。大阪府立高校教員。90年に長女を医療事故で亡くし被害や情報公開の市民運動に関わる。著書に『ぼくの「星の王子さま」へ』（幻冬舎文庫）等。
<http://homepage1.nifty.com/hkr>